

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第 110 回 (2018. 3. 9) の要旨

拝読文(『真宗聖典』57 頁)

空・無相・無願三昧、不生不滅もろもろの三昧門を修す。声聞・縁覚の地を遠離せり。阿難、かのもろもろの菩薩、かくのごときの無量の功徳を成就せり。我ただ汝がために略してこれを説くならくのみ。もし広く説かば、百千万劫に窮尽すること能わじ。」

仏、弥勒菩薩・もろもろの天人等に告げたまわく、「無量寿国の声聞・菩薩、功徳・智慧称説すべからず。またその国土は微妙・安樂にして清浄なることかくのごとし。何ぞ力めて善をなして、道の自然なることを念いて、上下なく洞達して辺際なきことを著さざらん。宜しくおのおの勤めて精進して、努力自らこれを求むべし。

先回の最後の方、『真宗聖典』57 頁 3 行目のところに、「空・無相・無願三昧、不生不滅もろもろの三昧門を修す」という言葉が出て来ておりました。「空・無相・無願」というのは、我われは、有相、相があるということに、自他共にこだわる。特に現代は、見栄えにこだわるということが文化になっている。それで仕事にもなる。ファッションメーカーとか。つまり、人間の外側の相が非常に気になるということで経済が成り立つ。しかし仏教では、人間の実体的な面に執われることをどこかで否定する。本質は「無相」なのだという。

そして最後に「無願」という言葉が出てくる。願という言葉が、欲願といって煩惱に絡んだ場合は、面倒なことを起こしてくる。特に現代社会は、欲同士が自己閉鎖的なかたちで、欲が内向きになっている。それは、アメリカの大統領だけではなくて、一人ひとりがみんなどこか内向きになっている。そういうことに対して、人間は、本当は「無願」であれという。

これは、実は、法蔵菩薩が立ち上がる時に、この「空・無相・無願」の三門のところから立ち上がったのである。それを親鸞聖人は、法蔵菩薩の願心が、衆生の中に響いてきて、我われが法蔵菩薩を信ずることができる。我われは自分で「空・無相・無願」とは何であるかを理解して、そういう「空・無相・無願」に成ろうと努力して成れるものではないです。

更に展開して、「声聞・縁覚の地を遠離せり」と。「声聞・縁覚」というのは、二乗という、大乘仏教からすると一番困難な、救い難い方向に固着してしまった存在をいう。「声聞・縁覚」とは、仏法を聞こうとするのが、声聞である。仏法の中で、自分なりに覚りを開いていこうとするのが、縁覚である。縁覚は、独覚ともいう。仏弟子の中に、仏法を求めるといことは、自分が欲を消して行って、文字通りに「空・無相・無願」の存在に自分が成っていく。自分の煩惱を消し、社会的関心を消す。そういうことが、仏陀が教えようとする人間の方向なのだとして理解して、歩んでしまったものの行く先、それを阿羅漢という。これほど、大乘仏教からすると扱いにくい存在はない。

大乘仏教は、自分ひとりがたすかるとい課題ではなくて、人類がたすかるとい課題にお

いて自分もたすかると。こういうことが、大菩提心と教えられている。そういう大乘の菩提心ということの意味が分からずに、声聞・縁覚という小さな覚りに閉じこもってしまう。

そういうわけで、「声聞・縁覚の地を遠離せり」という言葉も、声聞・縁覚というところに陥った人は、そこから脱出することがほとんどできなくなる。それに対して大乘の菩薩は、これをとうに遠離しているということである。これが実は、第二十二願、阿弥陀如来の浄土に触れることにおいて、そこに触れた衆生はみんな、声聞・縁覚の心を遠離すると。

そして、「阿難、かのもろもろの菩薩、かくのごときの無量の功徳を成就せり」と。阿弥陀の浄土に触れた菩薩、そしてまた諸仏の世界にかえってきた菩薩。こういう無数の菩薩、無量の菩薩が、ここまでに語ってきてあるような功徳を成就するのだと。

しかも、「我ただ汝がために略してこれを説くならくのみ。もし広く説かば、百千万劫に窮尽すること能わじ」と。大乘の仏道の課題を自由自在に成就する力が与えられるという内容については、語ろうと思えば限りがないと。つまり、『華嚴経』が問題にしているような問題です。『華嚴経』という経典がいろいろと展開して、最後に普賢菩薩という菩薩の名前が出てくる。その普賢菩薩は、実は第二十二願がモデルにする菩薩なのだ、というふうに親鸞聖人はいただかれたのです。そして「普賢の徳を修する」という課題を、曇鸞大師がいうところの還相回向のはたらきとして、親鸞聖人は押さえられるのですね。

その第二十二願の内容が展開して、『真宗聖典』19頁の4行目です。「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」と。普賢という菩薩のはたらきが、第二十二願によって与えられる大涅槃です。第十一願・第十一願成就によって、大涅槃が衆生に与えられるということを誓っているわけです。その与えられた涅槃は、実は、第二十二願という願心を起こしてくる。大涅槃と別に第二十二願があるのではない。大涅槃自身が第二十二願という内容になるのだと。こういうのが、親鸞聖人がいただかれた第二十二願の意味ですね。

第二十二願、真実証というのは謎なのです。親鸞聖人は、真実信心は我われが獲得することができると。真実信心は、第十八願成就文、つまり名号が回向されてくる、そこに本願力のはたらきを本当に感ずるなら、金剛の信心を得たということが成り立つのだと。しかし、真実証は、真実信心にとって、必ず果が与えられる、というかたちで誓われている。本願力が誓っている内容だけれども、直接我われが真実証を得たとは言えないのだと。教・行・信・証すべては、如来の回向として出発しています。証も、如来の回向として我われに与えられる。けれど、それを与えられたから獲得したと言えるかということ、そうは言えない。獲得できるのは信心までです。真実証は、その信心の未来に必ず与える、というかたちで与えられている。不思議な構造ですね。こういうようなかたちで、親鸞聖人は、本願力回向の功徳というものを語ろうとされるわけですね。

阿難を対象にした『大無量寿経』の段は、一旦、ここまでで結ばれます。

ここで、もう一度仏陀釈尊が、対告衆を呼び出す時に、「仏、弥勒菩薩・もろもろの天人等に告げたまわく」という言葉から始まる。これから弥勒段と言われるのですね。弥勒というのは、大乘仏教に來たって、常に呼び出される名前なのです。苦悩の衆生の代表者として、弥勒

という名前のもとで、人間の本当の解放を呼びかけていこうというのが、大乘仏教の經典の趣旨になるわけです。特にこの『無量寿經』の後半の非常に大事な内容が言われてくる。

それで弥勒に呼びかけて、「無量寿国の声聞・菩薩、功德・智慧称説すべからず」とまず語りかける。声聞というのは、声聞根性でこの現世ではほとんど煩惱を起こさなくなってしまう、覚りの中に閉じこもってしまう、ある意味で人間が完成してしまうのですよ。そういう存在が、本当に大乘に回心するということがほど難しいことはない。けれど法蔵願心は、そういう声聞に呼びかけて、声聞であろうと、二乗であろうと、必ず浄土に生まれさせると。そういう本願の場に生まれさせれば、もう場の力でおのずから大涅槃界に触れて、大乘の菩薩に転じていく。大乘の願心の担い手になっていくということです。

仏陀釈尊は、そういう本願を説き終わったあと、「無量寿国の声聞・菩薩、功德・智慧称説すべからず」と。ここまでさんざん説いて来たけれども、功德は説き尽くすことはできないと。「またその国土は微妙・安樂にして清浄なることかくのごとし」と。そういうふうに先ず説いて、そこから不思議な言葉が出てくる。

「何ぞ力めて善をなして、道の自然なることを念いて、上下なく洞達して辺際なきことを著さざらん。宜しくおのおの勤めて精進して、努力自らこれを求むべし」と。この不思議な言葉に着目したのが清沢満之という方ですね。清沢満之が『無量寿經』下巻を読んでいて、ものすごく感動された。この言葉をノートにも書かれたし、自分を取り巻いてくる弟子たちに対するお手紙にも書いておられる。これは清沢満之の大きな課題でもあったのですね。

それは、本願他力の信心というものが近代という時代に向かって、人間の解放を呼びかけることができるためには、封建時代の「閉鎖的安心」が、何よりも問題だと思うのですよ。つまり、封建時代は、身分が固定されて、自分たちの身分に安住せよというかたちでしか教えをいただくことができない。だから、閉鎖化せざるを得ないわけです。「ありがたい」となったらそれでよいのだと。現実の差別問題とか、不自由さだとか、そういうような問題に目をつぶって、与えられたところに安住しさえすればそれでよいのだというふうに、教えをいただいている。念仏の教えが、そういう閉じこもったかたちで、聞かれてしまったということです。結局、何か守らざるを得ないものがあると、「空・無相・無願」に立てないわけですよ。そういう問題が残ったのでしょ。

とにかく本願の教えに触れつつ生きていくということが大事な課題なのです。清沢満之が気付いたのは、そういう丸めこんでいくのではなくて、本当に信仰に向かって、我われは凡夫として戦っていかなければいけないという。そういう方向性を、『無量寿經』のこの言葉は、我われに呼びかけているのではないかと。

そして、「力めて善をなして、道の自然なることを念いて、上下なく洞達して辺際なきことを著さざらん」。この善は、必ずしも社会的善、倫理的善ではない。仏法の善という意味を持つのでしょうか。清沢満之は、宗教的意味の善と倫理的善の意味とは質が違うということを言っているのです。宗教的意味の善、つまり本願から呼びかける善というのは、やはり大涅槃に指向する方向を与えてくるものが善だと。この世の欲界の方向に向かわせるような善は、むしろ

悪だと。こういう定義を清沢満之はしています。善という言葉が同じであっても、内容まで同じであるとは言えないと。

「力めて善をなし」ということは、この善については、「転悪成善」ということがあります。この世を生きていれば悪をせざるを得ない。そういう悪をするということが、実は、本願念仏の大悲の中に身を置けば、縁となって、悪を転じて善と成すと。こういうことが成り立ってくる。「転悪成善」、「転成」が起こると。質が変わると。こういうことまで親鸞は言いますから、そういう眼でこの言葉はいただいております。

「力めて善をなして」という。清沢満之は、ともすると、彼は自力なのではないかという疑いをかけられるのですよ。他力であったら、自力は要らないのではないかと。自力の努力など要らないのではないかと。他力に安住すればいいのではないかと。そういう方向で、いわゆる封建教学と私が見る、そういう方々からの非難が清沢満之に集中していたわけです。

しかし清沢満之は、近代という時代を本当に生き抜くには、単に妥協して安住するだけでは間に合わないということを感じて、この本願力の信心の持つ大きな質に、つまり、第二十二願の結果を受けて弥勒が呼び出されるという構造になっているわけですがけれども、ここに大きな課題を読もうとなさったのですね。

それで、「宜しくおのおの勤めて精進して、努力自らこれを求むべし」と。これは、あたかも自力で精進することを勧めているように見える。

清沢満之の有名な言葉に、「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉があります。この「天命に安んずる」というのは、親鸞の言葉で言えば、本願力に安んずるということです。本願力に帰すると。そして、「人事を尽くす」という面が、清沢満之の姿勢の大切なところですね。

「他力安心」というものには、天命に安んじたら、もう安住して何もしないでもよいのだ、という発想がありがちなのですよ。

そうではなく、本願力に帰しても自分の分限を尽くして生きるのだと。それは決して、自分の自力で覚りへ向かって歩むというのではなく、本願力をいただいて全力を尽くして生きるのだと。全力を尽くすといっても、倫理の立場に関わった場合には、自分たちは罪であるということを感じざるを得ない。そういう場合には、倫理だけならば、地獄行きである。自分のような罪人は、罪業深重だと反省したら、地獄に行くしかない。苦悩するしかない。

そういう時に、本願力に帰していれば、本願力にたすけられて、「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず」と言われるように、明るみが与えられるのだと。こういう救いを清沢満之は喜んで、亡くなっていかれたわけですね。

清沢先生が、ここに気が付かれたということは、非常に大事な問題を我われに投げかけてくださっていることではないかと思うのです。この問題は、現代に向かって教義学を構築する場合の、一つの大事な鍵ではないかと思います。私も何も分かっているわけではないですけども、課題として受けとめていきたい事柄なのですね。

文責：菊池弘宣（親鸞仏教センター嘱託研究員）